【 6 】

氏　　名	五之治　昌比呂（ごのじ　まさひろ）
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第　165　号
学位授与の日付	平成12年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科言語学専攻
学位論文題目	ペトロニウス『サテュリコン』研究
論文調査委員	（主　査）助教授　高橋宏幸　　教授　中務哲郎　　教授　エリザベス クレイク

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，ローマ皇帝ネロの寵臣であったティトゥス・ペトロニウスにより紀元後60年代前半に書かれたと考えられる小説『サテュリコン』を取り上げる。第1章が序論として，伝承状況から形式およびジャンル，さらに，主題と作品全般の性質など，作品自体に内在する解釈困難な諸点に目を向け，これらを研究史に沿って見直しながら，従来の研究の主要問題点を指摘したのち，第2章から第4章はこれらの問題点について批判的な解決を試みる。第5章の結論は前章までの検討を整理したうえで，作者ペトロニウスの創作意図をさぐる。従来の研究の不十分さと行き過ぎを是正しつつ，『サテュリコン』という作品独自の語りの仕掛けをテキストに即して明らかにすることが本論文の目的である。

『サテュリコン』を初めて読んだ者は誰でも，これはいかなる作品か，どのような意図のもとに創作されたのか，との疑問を抱く。その原因の第一として，作品が断片でしか伝わっていないという事情があり，このことが全体像の把握を困難にしている。しかし，それと同時に，一方には，雑然として摑み所のない物語展開がある。すなわち，主人公エンコルピウスと恋人ギトンが繰り広げる恋愛と放浪という主筋自体が多様な逸話と場面を含むことに加えて，主筋と関連の薄い挿話，あるいは，登場人物の吟唱という形でかなり長い独立した詩編が組み込まれる。他方，叙述の調子も場面ごとに写実的と情緒的，あるいは，卑猥と高邁というように極端に変化する。

このような作品について，第1章第1節では，まず，主題やモチーフの面から何らかの一貫性を見出そうとした従来の研究，すなわち，「プリアポスの怒り」説と「ギリシア小説のパロディー」説には無理があることを確認する。そのうえで，作品の叙述面での特質，つまり，小説全体が物語の主人公でもあるエンコルピウスによって一人称で語られる点に着目した研究方法を検討する。これは近年さかんに行われているもので，語り手が描き出す事柄は虚像であり，この虚像を現実のごとく語る主人公を作者は冷ややかに提示しているとして，そこに生じるアイロニーに作品の特質を認めようとする。しかし，これは基本的方向として妥当と考えられるものの，従来の研究では3つの問題点が指摘できる。すなわち，1．エンコルピウスの性格造形に関する誤解，2．テキストの具体的分析の不十分さ，3．アイロニカルな要素に関する行き過ぎた読み取り，である。本論文はこれらの問題点を正そうとするが，もっとも根本的な問題点は1であるので，これについて引き続き第2節で検証した。エンコルピウスは修辞学教育の影響を強く受けた青年であり，彼の語りは自分の経験を修辞学の訓練に常套の仮想的場面になぞらえる。そこから，現実を歪める叙述表現がなされる，というのが従来の説明であった。この「現実を歪める」という点は正しい理解であるが，修辞学そのもの，あるいは，修辞弁論風の語り方自体を最初から否定的に捉えることには根拠がなく，主人公の妄想の原因を修辞学に帰することには問題があることを示した。

第2章はエンコルピウスが自分の経験を仮想的場面になぞらえて語ることを現代の小説理論に言う「信用できない語り手」という用語を使って捉え，その具体的な現れをテキストに即して観察した。一人称の語り手が自分の経験を語る形式の小説では，ある出来事について，これに対処する際の性向や認識能力により，語り手がその実像ではなく，虚像を読者の前

に提示する，ということがある。そのような語り手が「信用できない語り手」であり，この語り手に対して作者は批判的な目を向けていると考えられる。エンコルピウスの場合には，彼の経験する現実の多くはきわめて卑俗なものであるが，彼がそこに叙事詩や悲劇などの仮想的場面を重ね合わせるとき，そうしたフィルターを通して高邁であるかのような幻想が示される。第１節は以上を確認して，次節以下の観察の前提を示した。第２節はエンコルピウスが「信用できない語り手」として現れる典型的場面として，79章９節から80章６節を取り上げた。このエンコルピウス，ギトンにアスキュルトスを加えた三角関係の場面で，エンコルピウスは自分と恋人ギトンとの関係を高潔な道徳観にもとづくかのように思い込んで語っている。が，それと同時に，エンコルピウス自身はそれとは気づかぬまま，恋敵アスキュルトスの現実的な言葉とギトンの薄情な行動をもまた語っている。そこに現実を歪めて語るエンコルピウスのフィルターを露わにする作者の仕掛けがあり，語られる幻想についてアイロニーの効果が認められることをテキストの詳細な分析により指摘した。第３節は同様の仕掛けが認められる他の場面として，１．ギトンとの戯れ（11章１～４節），２．ギトンとの再会場面（91章１～９節），３．キルケとの逸話（126～132章），４．鵞鳥との決闘場面（136章４～７節）について検討した。ギトンに関するエンコルピウスのメロドラマ的な幻想に対して，１ではアスキュルトスの言葉によって，２では描写に込められた二重の語義によって冷めた現実が露呈されていることを示した。３では，エンコルピウスがキルケを女神のように美化した描写が常套的修辞法に従っていることを観察したうえで，キルケの言葉や仕草に込められた暗示がキルケの虚像を露わにしていることを指摘した。また，４では，鵞鳥への復讐という馬鹿馬鹿しさが明白な出来事にまで叙事詩的な幻想を重ねた表現が行われることを観察した。

第３章と第４章は，アイロニカルな要素に関する行き過ぎた読み取りという第１章に示した従来の研究の問題点を正すために，修辞学そのものが場面の中心に現れる箇所を検討した。このうち，第３章はエンコルピウスに関わる場面を扱い，第１節で現存作品の冒頭に置かれたエンコルピウスによる修辞学教育批判のスピーチを取り上げた。従来の研究はこのスピーチが額面どおりに受け取れないという理解に立っており，そのもっとも有力と思われる論拠は，エンコルピウスは仮想弁論（修辞学の訓練において特定の状況を想定して行われる弁論）を批判しているにもかかわらず自身のスピーチが仮想弁論の特徴を備えた語り方となっている，というものである。これに対し，このスピーチは仮想弁論を踏まえることが明示されている一方，その内容は雄弁の重要性を強調しており，修辞学自体ではなく，当世の修辞学教育に対する批判を「共通のトポス」として小説の中に挿入したものであることを論じた。

続く第４章は主人公以外の人物に論及した。第１節はアガメムノンのスピーチについて，第２節はエウモルプス登場場面を取り上げた。従来の研究においては，この二人の登場人物も作者が批判的に創作したものとされ，彼らが直接話法で語るスピーチや挿話は馬鹿げたものであると解釈されてきたが，いくつかの点からこの解釈は誤っていることを指摘した。そして，アガメムノンのスピーチは，文体こそ修辞学教師に似つかわしいものであるが，その内容は正当なものであること，エウモルプスによるスピーチ，挿話，長詩は，どれも出来映えの悪いものではなく，作者が自分の趣味に合った小品として小説中に挿入したものであることを示した。

第５章は前章までの議論を総括したうえで，ペトロニウスの創作意図に考及した。まず，作者の主たる目的はあくまでも散文による冒険の物語を書くことにあり，これを「ギリシア小説」とは異なる作品に仕上げるためにさまざまな独自の要素を数多く盛り込んで創作を行った，という見通しを示し，そこから，注目すべき三つの要素に触れた。第一に，作者はギリシア小説のパロディーを意図した場面を小説全体に散りばめた可能性があるが，現存するテキストの量が限られていること，および，他のジャンルとの共通性も考慮して慎重である必要がある，と判断した。第二に，修辞弁論的な直接話法について，このようなスピーチは，作者が一種の「遊び」として修辞弁論風に仕立てたものであり，従来解釈されているような，話者のキャラクターを浮き彫りにするためのものではないことを指摘した。第三に，作品中に多数見られる人物の外貌のリアリスティックな描写に目を向け，こうした描写は描かれる人物の内面的性向を照らし出すことを意図したものであり，そのような手法は古典文学の中では特筆すべきものであることを指摘した。これらに加え，第２章で明らかにした，主人公の語る虚像を暴露する物語技法上の仕掛けが『サテュリコン』という小説の独自の特色であることをあらためて述べ，論の結びとした。

論文審査の結果の要旨

「趣味の審判」としてローマ皇帝ネロに優雅な技芸に関する助言を行ったペトロニウスの作と考えられる小説『サテュリコン』は，時代の爛熟を生々しく映し出した点でラテン文学の中に異彩を放つ。写本に示される題名は「サテュロス的な物語」を含意する一方，サトゥラ，すなわち，風刺を基調として雑多な要素を盛り込んだ文学ジャンルを想起させる。そこから，サテュロスのように放縦な登場人物たちの繰り広げるさまざまな挿話が風刺や批判の対象としているのは何か，という問いから出発して作者の創作意図をさぐることがこれまでつねに作品研究の中心をなしてきた。近年では，当時の世相，あるいは，実在の人物とその行動と密接に結びつける，やや素朴な見方は顧みられることが少なくなり，他の関連する文学ジャンルとの関わり，さらに，叙述の技法や文体に論及する，より文学的な理解が進められてきた。なかでも，現存作品が断片であること，比較すべき他の作品がきわめて少ないこと，さらに，構成と叙述の雑然とした性質など，作品になんらかの統一性を見出すことが困難な状況において，全体に一貫した唯一の要素，すなわち，物語の語り手に注目した研究が盛んになってきたことは当然とも言える。『サテュリコン』は主人公エンコルピウスが一人称で語る形式を取る。性的倒錯者で盗癖がある一方，文学を偏愛する主人公が彼の体験した出来事を語るとき，そこにはしばしば歪みが生じており，その歪みの表現の狙いと効果について問われる。本論文は基本的にこの研究方向に沿っている。そのうえで，論者はまず「信用できない語り手」という現代の小説理論を援用した独自の着眼から考究し，主人公の語りに虚像を織り込みながら，同時にこれを露呈させる作者の仕掛けをテキストに即して観察し，その効果を明らかにした。ついで，主人公の語りについて修辞学教育の影響を過大視する従来の研究に反論して批判的な指摘を加え，その是正を試みた。最後に，以上の議論を踏まえて作品全体の意図に論及した。その問題意識と解決のための議論は全般に穏当で着実でありながら，解釈に新たな視点をも提起して，作品について深い理解を示したことは評価に値する。

論者は，第５章に示すように，作者が書こうとしたのはまず第一に散文による冒険物語であり，盛り込まれた多様な要素はこの基幹に加えられた「遊び」，つまり，読者を楽しませるための肉付けである，という，ある意味で素朴な立場に立っている。しかし，この論者の見方は本論文が「信用できない語り手」という現代の小説理論を論究の出発点としたことと適切なバランスをとっている。というのも，それは主人公の語りに修辞学の及ぼした害毒を重視する立場，さらに，そこに作者による文学論の表明まで見ようとする立場など，テキストから離れた理解や理論に走りすぎた解釈に対するアンチテーゼをなしているからである。

第３章，第４章はこの是正を意図した観点からの議論である。やや反駁にこだわった気味があるが，修辞学が挿話の中心的素材をなしている箇所に焦点を当て，修辞学自体，あるいは，挿入される独立した詩編そのものに批判の目が向けられていないことを示した。この論証では，修辞学教育において行われた「予備演習」や訓練項目としての「共通のトポス」，また，常套的に用いられた「格言的言い回し」など，教育の具体的な要素に論及して説得性を高めた。と同時に，セネカの悲劇やルカヌスの叙事詩のパロディーと見られることの多い挿入詩編について，それ自体として楽しむ方向を示唆したことには意義が認められる。

本論文の主眼となる議論は第２章である。「信用できない語り手」であるエンコルピウスのフィルターを通して「卑俗な現実」ないし「冷めた現実」がどのように「叙事詩的・悲劇的な大げさなビジョン」として描かれているか，エンコルピウスの語りの性質とそこに施された作者の工夫について観察した。取り上げたそれぞれの場面についてテキストの精密な分析と解釈がなされているが，なかでも，キルケの姿の描写場面についての考察では，文学上の常套が，一方で彼女を女神のように描き出しながら，同時に現実を露呈させることにも与り，その両面で機能していることを指摘したことが評価される。このことを論者は，キルケの虚像を出現させる常套的描写パターンを丹念に跡づけたのち，その裏で，常套的なモチーフや語句の使用が彼女の実像を垣間見させている仕掛けを検討することにより，論証してみせた。

本論文には，結論のあとに今後の課題というより，むしろ，解釈の立場の表明のような記述が見られるなど，全体の論の構成にややちぐはぐなところがある。また，風刺詩や仮想弁論といったローマ的色彩に重きを置かなかったことから，では，ラテン文学としての『サテュリコン』の特色は何か，という質問が調査委員からなされた。ウェルギリウスなどでも登場人物の抱く幻想が物語展開に重要な働きを担っていることが指摘されている一方，恋愛エレゲイア詩人たちはいわゆる「主観

的文体」により自分の恋をさまざまなトポスの中において表現した。このようなことが『サテュリコン』に受け継がれているのかは次の大きな課題であろう。しかし，このような問題を提起していることは，それ自体，本論文が作品理解に適切なスタンスをとっていることの証左であると言える。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成12年10月４日，調査委員３名が試験を行った結果，合格と認めた。